東北大学東北アジア研究センター ニューズレター

CNEAS newsletter

Center for Northeast Asian Studies

107

2025 Winter

巻頭言

やればやるほど深まる謎

平野直人（教授）

今年の7月30日11時24分、ロシア・カムチャツカ半島ペトロパブロフスク・カムチャツキー東南東沖でマグニチュードMw 8.8のカムチャツカ地震が発生した。移動する太平洋プレートが千島海溝からカムチャツカ半島側のプレートの下に沈み込み、両プレートとの間に歪みが蓄積されて発生した超巨大地震である。同沖合でマグニチュード9クラスのプレート境界型巨大地震の発生は1952年以降73年が経過していた。いっぽう、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震（Mw 9.0）は、前回の貞観11年から1142年後に発生した（数百年間隔説もある）。両者73年間隔と1142年間隔、おなじ太平洋プレートが沈み込んでいるのにこの大きな違いは何なのか？歴史地震を見誤っている可能性もあるが、もしかすると沈み込む太平洋プレートの構成岩石に原因があるかもしれない。

東北アジアに沈み込む太平洋プレートと、そこにあるプチスポット海底火山の地球深部探査船「ちきゅう」による深海掘削（IODP3 Exp.502）が今年11月、宮城沖ではじまった。これをもって沈み込む太平洋プレートの研究プロジェクトは、深海掘削というひとつの大きな節目を迎えた。太平洋プレートの実体解明は、たとえばプレート境界型巨大地震における震源断層の固着域と、数日から数週間かけてズレ動く低周波すべり（ゆっくりすべり）領域、両者の違いを解明することにも繋がるだろう。

学術研究は純粋な疑問に端を発し、それを解決するために造り出す作業仮説からすべてが始まる。2000年代初頭にはじまった「東北アジアに沈み込む太平洋プレートの実体解明」プロジェクトは、当時日本海溝で採取された「ひとつの不思議な火山岩」が最初の疑問であった。当時の常識では日本海溝ではあり得ないとされる種類の岩石だったため、氷期にこの海域まで運ばれた氷山が融解した際の落下物であると言われ、そこに火山活動があったとはまだ誰も信じていなかった。それでもなんとかこぎ着けた2003年の初航海で三陸沖日本海溝のさらに沖合の太平洋海上で初の広域音響探査を行った。その後のドレッジによる岩石採取、しんかい6500による深海底調査と進み、火山活動の存在を確認するに至った。2011年東北地方太平洋沖地震では自身が被害を受けた裏で、この大きな変動によって深海底で火山活動が引き起されていないかどうか、地震前と地震後の海底音響データをひたすら漁ったこともある。投稿論文の査読者から感情的な反論を受けて傷ついた回数は数え切れない。科学的に評価された提案が政治的な理由で却下されたこともある。世の中には納得できないことが多すぎるけれど、淡々と進めるしかないと自分に言い聞かせてきた。

深海掘削が実施され、ここまで推し進めてきた同志には敬意を表する。これからあがってくる岩石の解析はもちろん、岩石の分布を広範囲に把握する必要もある。また、今年発生したカムチャツカ地震の発生間隔はどう考えても短すぎる。一体何が起こっているのか？カムチャツカ沖太平洋プレート調査も必要だ。深海掘削でプロジェクトがひとつの節目を迎えたと言っても、次々と疑問がわいてくる。まだまだやることが山積みだ。

contents

1 巻頭言
2 定年退職にあたり
4 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
5 受賞・成果のニュース
6 新任ごあいさつ
6 研究データベース紹介
7 著書・論文紹介
8 活動風景

TOHOKU UNIVERSITY

Essay

四つの条件

千葉聡
地域生態系研究分野（教授）

ちば・さとし●東京大学大学院理学系研究科博士課程修了（理学博士）後、静岡大学理学部助手、東北大学大学院生命科学研究科准教授を経て現職。専門は生態学・進化生物学。

DNA 二重らせん構造の発見でノーベル賞を授与された偉大な生物学者のひとりは晩年、人種差別主義者に転落し、ネイチャー誌はその訃報に「悪名高き人物」の言葉を添えた。また「利己的な遺伝子」のコンセプトで一世を風靡し、学生時代の私にとって憧れの的だった、とある進化学者は今や度重なる差別発言で社会から顰蹙を買っている。

このようにベテランが昔日の創造性を失う代り、硬直した振る舞いで問題を起こす現象を、俗に「老害」と呼ぶ。生物学的には加齢に伴う脳の前頭前野機能の低下がその一因とされる。思い込みにブレーキをかける力や新しい情報への対応力が弱まり、自分の考えを見直して修正することが難しくなるのである。しかし最近の研究では、判断力や知識の活用の能力は 60 歳代で最盛になるとされ、その補正機能を考慮するなら生物学的な理由だけで老害化を説明するのは難しい。

むしろこれには個人の学習と成功の経験がより深く関係しているかもしれない。例えばある分野で成功したがゆえに、その体験から得た成功のルールをそれが機能しない異分野にも当てはめ、不適切な発言をしてしまう。環境の変化にもかかわらずかつての成功のルールに囚われた結果、現在では通用しない考え方をしてしまう等である。人間関係の変化もこの失敗の原因になり得る。例えば“王様効果”。大御所になるほど周囲が遠慮して批判や修正が効きにくくなるのだ。そして与えられた栄誉が「私なら全ての分野を洞察できる」と専門分野の越境への過信を生む。いわゆる“ノーベル症”である。

ではどうすれば老害化を回避できるのか。まずは老害になる前に潔く仕事を辞めることである。リスク管理の面からみれば定年は優れた制度だ。だが上記のプロセスを考慮するなら、老害化は若者でも起こり得る。逆に晩年まで老害化を回避することも可能だ。

実際、レオンハルト・オイラーは完全に失明した 60 歳代以降、76 歳で没するまでの期間に 400 以上の論文を執筆したという。日本では隠居後、高橋至時に弟子入りして暦学・天文学を学び、地図作成のため全国測量を行った伊能忠敬が晩成の一人だ。特に伊能は老いて商家経営から異業種に参入したにもかかわらず、分野越境に成功した。

彼らの共通点は第一に、誤りを修正し王様化を阻止する優秀な協力者の存在だ。第二に、オイラーは数論、力学、流体、天体、伊能は暦学、天文、測地学というように、いずれも価値観の違う他分野との対話と協力に勤しんだことである。またオイラーは数学の技法、伊能は商家で培った計画、記録と品質管理の技術という強みの中核となる専門性を一貫して磨き続けた点も似ている。そしてどちらも自らの強みが生かせる隣接分野を活躍の場に選んだ。

これを踏まえるなら、老害化抑止に効果的な条件は、①修正と検証に勤しむ協力者の存在、②異なる分野との交流、③専門分野のたえざる研鑽、④専門を生かせる隣接分野への越境、であろうと推測できる。

私にとって東北アジア研究センターは幸いにもこれら 4 条件をすべて備えていた。大学時代の知人の多くが 50 歳前後で失速する中、ここまで走りきれたのはセンターの多彩な分野とその教員、スタッフとそれを支える事務方、そして容赦ない批判と反論の刃を向けてくる学生・ポスドクのおかげであろう。

大陸の自然の研究自体が私にとっては自らの強みを活かした隣接分野への越境であり、文系分野の多様な価値観と問題意識に自分の評価軸を揺らされ続けたおかげで、特定の“成功ルール”に囚われるのを免れた。

老いと劣化のプロセスは個人だけでなく、企業や大学、研究所など組織にも当てはまるだろう。上記の老害化抑止の 4 条件を備える点で、我がセンターは組織としての若さ、つまり創造性と柔軟性を維持し続けるうえで有利な立場にある。今後も多彩な異分野が共存し続けることを前提に、分野間の交流や越境・共同研究と、革新的な研究への挑戦によるレベルアップ、そして強みの中核である専門性―つまり伝統も大切にすることで、組織と研究活動の硬直化を回避できるだろう。激変する中国やロシアとの関係に適応した新しい組織へと発展していくはずだ。

私自身も着任以来自らの役割として、菊地先生が築いた極東ロシアの生態学研究の伝統を受け継ぎ、守りつつ、太平洋まで―小笠原の島嶼域まで視野を拡張し、進化研究を加えることで組織の伝統と革新の両立に貢献できたと思う。また異分野とも交流を進め、固定観念を修正し、革新性を生み出せる関係を築けたのではないか。例えば荒武先生と立案した古文書研究とゲノム解析の融合研究は、社会的にも大きな注目を集める成果へと結実した。瀬川先生との何気ない会話から発展した宗教・信仰と生物進化の関係についての共同研究は、コロナ禍のため残念ながら実現に至らなかったが、当時の議論に触れた学生たちがいずれどこかで開花させてくれるに違いない。

何にせよ楽しく仕事をさせていただいた。深く感謝申し上げる。

さて今後の私の予定だが、とりあえず 1 年ほど別の研究室に弟子入りし、新たな学びを得て親方意識を除去したのち、専門を生かしつつ隣接分野―エッセイストとして生計を立てようかと思っている（今も新たに 3 冊の新書を同時進行で執筆中である）。もっとも生成 AI の目覚ましい発展を考えると、物書きは早晩無用になりそうだ。そこでその次は専門知識と旅館従業員時代の経験を生かして別の隣接分野に転じる予定である。小笠原でエコツーリズム事業とホテル経営に乗り出すのである。成功した暁には本土に進出、大々的に事業を展開する。そして目指すのは、かのトランプ氏のようなホテル王、、、、

いや、こんな野望を抱くのは老害化の兆候かもしれぬ。くわばらくわばら。

Essay

国際情勢認識と大学

柳田賢二
モンゴル・中央アジア研究分野（准教授）

やなぎだ・けんじ● 1960 年生まれ。1983 年東京外国語大学ロシア語学科卒業。1986 年東京大学人文科学研究科修士課程（露語露文学専攻）修了（文学修士）、1989 年同大学同研究科博士課程（同専攻）単位満了退学。専門はロシア語学および中央アジアでの言語接触研究を中心とした社会言語学。

私には 20 年以上も続く「肩書き」がある。それは、「学務審議会外国語委員会（2022 年度以降は「学務審議会初修語委員会」）ロシア語教科部会長」というものである。

「ロシア語教科部会」は、最大時でも専任 1 名（＝部会長こと私）と非常勤講師 2 名（いずれも他大学教授）だけだった極小の組織である。それでも、ロシア語を教えるだけでなく全学部共通の選択必修科目であるロシア語の教育全体に責任を持つこの職は甚だ多くの物理的仕事量と恒常的な緊張を要するものであり、私にとってはこれが最大の「本務」であった。所属部局である東北アジア研究センターの事務室との間よりも大学本部教務課との間の方が、緊急の用事で電話やメールのやりとりをする頻度が高かったほどだ。

本センター内部でも長いこと理解されていなかったが、1997 年のセンターへの配置換え以来私が間断なくロシア語の授業を週 3 ～ 6 コマ（現在は 4 コマ）も持っていたのは、本センターの業務としてである。1993 年 3 月の教養部解体時、ロシア語の専任教員ポストは 2 つあった。それがいずれも言語文化部（後に廃止）に移り、その一方が私を載せたまま本センターに移されたため、ロシア語の全学教育を行う義務の半分が本センターに移ったのである。もう一方のポストは国際文化研究科を経て現在の高度教養教育・学生支援機構の前身に移った。2006 年に当該のロシア語教員が退職し、空きポストとして同機構の前身に移管されたのだが、その頃がロシア語選択者が最も少ない時期だったせいで英語に転用されてしまい、現在に至る。

私が 1992 年に東北大学に採用されたのは教養部ロシア語の専任講師としてであった。それゆえ、私は、東北アジア研究センターという研究組織に属しながら、体感として半分以上の時間を全学教育ロシア語の授業と学生対応と事務作業に割かなければならなくても仕方がないと考えていた。また、本学学生に対するロシア語の授業とは、自然言語であるロシア語を説明できる音韻論と文法理論を文献および科研費でのフィールドワークで得た知見を使って明快に説く場であり、自らが頭の中で考えている理論を高めていくのに最適の場であった。そしてロシア語選択学生は概して理解力が高く、ロシア経済が持ち直した 2000 年代末からロシア語選択者数も漸増し始めた。2022 年のウクライナ戦争勃発後少しの減少があったとはいえ、現在でも「1 クラス＝ 30 人台前半」という適切な人数である。

ところが、である。私が定年退職で抜ける 2026 年度のロシア語教育は、全面的に非常勤講師に任されることがどこかで決められてしまった。つまり、本センターがすぐにはロシア語を教える専任教員を採用できないなか、「言語・文化に関わる教養教育の高度化と更なる発展に寄与すること」を使命の一つとし、教養部ロシア語由来のポストを持つ高度教養教育・学生支援機構までもがロシア語の専任教員を採用しないということである。これだけ重大な事項がロシア語教科部会に一言の相談もなく、初修語委員会での議題にもされずに決められたのだ。9 月下旬～ 10 月上旬の同委員会の「メール審議」で私が猛反発したことは言うまでもない。しかし、何かの忖度が働いたのか、私に同調する声は上がらず、「時間切れ」で強引に押し切られた。

本学を含めた国立大学法人がみな法人化以来続く運営費交付金の減額で苦しんでいることは承知している。それでも、このロシア語専任教員の退職不補充と非常勤丸投げが決められたことについては、国際情勢の認識度が足りないと言わざるを得ない。本学は文学部に露文専攻がなくとも私の教え子たちが研究や職業生活でロシア語を使い、活躍していることを私は昨年までの初修語委員会で何度も述べたが、一顧だにされなかった。

現在ウクライナに限らず東欧のあちこちで軍事的に危険な事態が毎日起き、しかもエスカレートしている。本 2025 年 6 月、日本を上回る経済大国であるドイツが国家予算で、GDP 比「防衛分野 3.5％＋安全保障関連 1.5％」とすることを決定した。またバルト三国は 6 月、ポーランドは 8 月に対人地雷禁止条約脱退を国連に正式に通知した。9 月から 10 月にかけて、ロシアの軍事用無人機がバルト三国とポーランドどころかドイツにまでたびたび侵入した。そしてまた、それ以前にリトアニアが NATO 軍と別枠でドイツに対し軍隊のリトアニア駐留を要請し、この 5 月から実際に駐留が始まっている。いつ戦争が始まっても不思議でない場所はここだけではない。モルドバ * 国内にある親露の未承認国家「沿ドニエストル共和国」はモルドバ政府と緊張関係にあり、ウクライナの西の国境に接しながら国内にロシア軍の基地がある。この「沿ドニエストル共和国」は長年ロシアから事実上無償で天然ガスを供給されてきたが、ウクライナがロシアとのガス通過契約延長に同意しなかったため 2025 年 1 月以来ガスの供給が停止され、深刻な燃料不足にある。いつ何が起こるか分からない。

こうした状況は、実は我が国でも NHK-BS では欧米豪等のニュースを引用する形で報道されている。しかしゴールデンタイムの地上波 TV と新聞ではほぼ無視である。我が国のジャーナリズムは国際情勢に関してひどく劣化してしまった。大学までもが同じになるのだろうか。

来年度から東北大学は、国立七大学のうちで唯一ロシア語の専任教員を置かない大学となり、ロシア語履修学生たちが履修および学習に関する詳細を相談できる先生すらいなくなる。このままではロシア語は初修語委員たちにとって単なる厄介物となり、「廃止」という最悪の事態を迎えることが目に見えている。国際情勢を無視し続けるなら、東北大学の未来は危うい。そして、もし他の大規模大学でもこうした政策が採られるのであれば、もはや我が国全体が危うい。

* 旧ソ連モルダビア共和国。ウクライナとルーマニアの間にあり、ルーマニア語が公用語。

国際シンポジウム

東アジアにおけるウナギの保全と持続可能な利用

石井敦
（日本・朝鮮半島研究分野／准教授）

会期 2025年9月7日
会場 東北大学川内萩ホール（仙台市）

ニホンウナギが国内外で絶滅危惧種に指定されてから10年以上が経っているが、回復の兆しはいまだに見えてこない。ニホンウナギの生息域は、東アジア全域からマリアナ海溝まで非常に広く、また、その稚魚であるシラスウナギは国際的に取引されているため、ニホンウナギの管理には国際協力が欠かせない。そこで、中国・日本・韓国・台湾の第一線で活躍されているウナギ研究者が一堂に会し、ニホンウナギとその資源管理について、公開の場で議論する初めての国際シンポジウムを開催した。

登壇者の方々と総合討論モデレータの白石広美氏（中央大学）

このシンポジウムのメッセージとして、東アジア地域での国際協力が必要不可欠であり、その足がかりとしての協働モニタリング提案、また、東アジア地域で管理手法の相互学習が可能なことなどが打ち出された。特に、協働モニタリング提案は海部健三氏（中央大学）の発表の中で、科学的モニタリングだけでなく、データを参加者で共有し、ステークホルダーとの協働を推奨すること、なども示された。

東北アジア研究センターの企画としては初めて、日中英3カ国同時通訳、そして対面・オンラインのハイブリッド開催であった。その甲斐もあってか、約150人の方々が登録してくださり、オンラインのQ&Aを含めて、非常に活発な議論が展開された。

本シンポジウムの共同企画者である中央大学の海部健三氏と白石広美氏、登壇者、参加者の方々、共催してくださった、国際自然保護連合・うなぎワーキンググループ、東北アジア学術交流懇話会、そして後援してくださった公益財団法人旭硝子財団に深く感謝申し上げます。

特別講演会

The East Asian War in World History（世界史における壬辰戦争）

程永超
（日本・朝鮮半島研究分野／准教授）

会期 2025年9月19日
会場 東北大学東北アジア研究センター大会議室

2025年9月19日、オックスフォード大学アジア・中東学部のジェームズ・B・ルイス（James B. Lewis）准教授による特別講演会「The East Asian War in World History（世界史における壬辰戦争）」がハイブリッド形式により開催され、国内外から多数の参加者を集めた。

ルイス氏は、16世紀末の壬辰戦争（文禄・慶長の役）を世界史的文脈から再評価し、この戦争が地域的な衝突を超えて、ユーラシア全体の政治・経済・軍事的変動と連動していたことを明らかにした。講演では、火器技術の伝播、人的交流、国家形成の進展といったテーマを通じて、東アジアにおける「近世」の始まりをヨーロッパとの比較を交えながら論じた。また、2026年春にBrill社から刊行予定の共編著『The Aftermath of the Imjin War in Early Modern East Asia』を紹介し、人口・環境・人身売買・技術・知識移転・国家建設などの多角的な視点から戦争の長期的影響を検討した成果がオープンアクセスで公開される予定であることを述べた。

講演後、立命館大学の谷徹也氏と新潟大学の川西裕也氏がコメンテーターとして登壇し、戦争の呼び方や日本の「近世」化論について意見を交わした。日英両言語による質疑応答では、東アジア戦争史研究を世界史的枠組みで再構築することの重要性について活発な意見交換がなされた。

本講演会は、英語講演ながら日本語スライドの提示や二言語での質疑応答を通じて、壬辰戦争研究の新たな地平を切り開き、東アジア史を世界史の文脈で捉える重要性を再認識させる貴重な機会となった。

ポスター

公開イベント

東北大学附置研究所等一般公開　片平まつり2025

上野稔弘
（中国研究分野／准教授）

会期　2025年10月11日
会場　東北大学片平キャンパス

去る10月11日（土）に、東北大学片平キャンパスを主会場として東北大学の附置研究機関・センターによる一般公開企画「片平まつり2025」が「ワクワク発見！研究所はワンダーランド」を全体テーマとして開催された。本センターもこれに参加し、「もっと知りたくない？私たちの東北アジア」と題して材料科学高等研究所（AIMR）1階会議室を会場に展示を行った。今回のセンター展示企画は研究室の枠を超えて二つのテーマにまとめられた。「東北アジアのフィールドワーク：山と海の自然・文化・歴史」をテーマとした展示では、デレーニ・アリーン教授と石井弓准教授の合同により、「中国と日本、山と海の対比」と題して生業・自然・祭りの視点から写真や映像による紹介を行うとともに、それぞれの地域での外国人としてのフィールドワークの実践について映像・パネル等で紹介し、フィールドワークで収集した現物資料の展示も行った。「東北アジアの自然環境：教室では教えない、大地をつくる溶岩の性質」をテーマとした展示では、後藤章夫助教により簡単な模擬実験を通じて火山噴火の原動力となるマグマの流れやすさを体感してもらう企画を実施した。今回の片平まつりは新型コロナ以降の変則的な開催を経てようやく完全な対面式の企画として開催される一方、会期を従来の2日間から1日に短縮し、一部の企画に事前予約制を導入するなど新しい試みを行った。当日は折からの悪天候に見舞われたものの小中高生や家族連れが多数訪れて盛況を見せ、本センターも会期中に約500名の来場者を迎えた。

来場者で賑わう会場の様子

受賞・成果のニュース

千葉聡教授が日本進化学会学会賞・木村資生記念学術賞を受賞

日本進化学会学会賞は、進化学や関連する分野において学術上非常に重要な貢献をした者に授与される。木村資生記念学術賞（木村賞）は公益信託進化学振興木村資生基金により、進化学や関連する分野において顕著な業績をあげた研究者に、故木村資生博士の当分野の世界的な業績を記念して授与される。千葉教授の受賞理由は以下（進化学会による受賞理由の抜粋）

「千葉氏は陸産貝類を中心に種の多様化に関する研究で顕著な業績を上げ、世界的に注目されてきた。小笠原諸島における陸貝の適応放散に関する研究は、多様性進化について特筆すべき重要な知見と示唆を示すとともに、保全生物学に大きく貢献した。これらの成果は多くの論文や著書で引用され、大きなインパクトを与え、小笠原諸島が世界遺産として登録された際の重要な資料となった。また、多くの優秀な後継者を育成し、学生との共同研究においても重要な成果を収めた。特に分散能力が低い貝類が鳥によって島嶼間や大陸間を移動すること、宿主や寄生者となる種が大陸間を移動し、新たな感染や寄生関係を引き起こすこと、歴史的な過去の外来種の移入が進化的変化を引き起こしていることなど、移入が生物相の進化に大きく影響を与えることを実証した研究は顕著な功績である」。

新任ごあいさつ
NEW FACULTY & POSTDOCS

#1

Battsengel Natsagdorj

外国人研究員
〔2025.11 ～ 2026.1〕

バトツェンゲル・ナツァグドルジ ▶モンゴル科学アカデミー歴史民族学研究所 研究員、資料学・文書情報センター長

私が自民族の歴史を研究する理由

私は、17 世紀以降のロシアとモンゴルの関係を専門とするモンゴルの歴史研究者です。研究の道を選んだ背景には、私自身の家族の歴史があります。ロシアの十月革命後の内戦により、私の家族は多くのブリヤート・モンゴル人と同様にモンゴルへ逃れましたが、親族の多くはロシアに残り、長い間家族は離れ離れとなりました。成長するにつれて、私は家族の運命だけでなく、ブリヤート・モンゴル人がどのようにして故郷やモンゴル世界から分断されていったのかに関心を持つようになりました。調べていくうちに、17 ～ 18 世紀にも同様の出来事が起きていたことを知り、歴史が繰り返されることを実感しました。現代でも戦争の影響で、多くのブリヤート・モンゴル人がモンゴルや他国へ避難しています。こうした歴史とのつながりが、私の研究の原動力です。滞在中はこのテーマをさらに深く掘り下げ、地域研究に取り組む方々と交流したいと考えています。

#2

Abel Polese

外国人研究員
〔2025.11.10 ～ 2026.2.28〕

アベル・ポレセ ▶ダブリンシティ大学准教授。欧州中央アジア研究学会会長。アルファラビ・カザフ国立大学、タシケント国立経済大学で客員教授を歴任。

中央アジア研究におけるガバナンス：インフォーマル性の位置づけ

このたび東北アジア研究センターに滞在する機会をいただき、心より感謝申し上げます。特にホストを快く引き受けてくださった高倉浩樹教授に深く御礼申し上げます。現在、欧州中央アジア研究学会（ESCAS）の会長を務めており、東北アジア研究センターの研究者の皆さまと協力できることを楽しみにしています。研究テーマとしては、気候変動への適応やレジリエンスに関心がありますが、関連分野での共同研究にも前向きです。

滞在中には、研究内容に関するセミナー開催のほか、博士・修士課程の学生向けのトレーニングも行いたいと考えています。著書『The SCOPUS Diaries and the (il)logics of Academic Survival』は、若手研究者のキャリア形成に役立つ内容となっており、論文投稿戦略や記事の構成方法などのアドバイスも可能です。

また、学術・文化イベントの企画にも積極的に関わり、私の所属大学や ESCAS との連携を通じて、東北アジア研究センターとの長期的なつながりを築いていきたいと思っています。

研究データベース紹介

地域研究デジタルアーカイブ「奄美地方で出土した中国産陶磁器」公開

東北アジア研究センターの地域研究デジタルアーカイブに、奄美地方で出土した中国産陶磁器の三次元データを公開した。本データは、共同研究「古代日本における東アジア文化の伝播と受容」で取得したデータである。その成果は、『東北アジア研究』Vol.29 号で研究ノートとして発表したが、その際解析に使用した 3 次元データを公開することとした。

対象とした喜界島と徳之島は、古代末から中世において、太宰府経由で中国産青磁が流通した。流通した青磁は、時期によって産地や特徴が異なる。先の研究ノートでは、破片資料でも（遺跡出土資料は、多くの場合小さな破片）、青磁高台の幾何学的形態測定学的分析により、流通した青磁の変遷史を復元できる事を検証する基礎研究であった。ローデータを公開することで、当該分野の研究が更に発展することを期待する。

徳之島・川嶺辻遺跡から出土した青磁破片資料

ISBN 9784065391341

進化という迷宮　隠れた「調律者」を追え

千葉聡著　講談社　2025 年 05 月刊　　text: 千葉聡

「進化は再現不可能な一度限りの現象なのか？ それとも同じような環境条件では同じような適応が繰り返し発生するのか？ 進化のあり方をめぐって、進化生物学者の間で20世紀から大論争が繰り広げられてきた命題をめぐるサイエンスミステリー」というのが出版社による本書の紹介である。前半は筆者が学生時代のフィールドワークが中心だが、後半は学生たちによるロシアや中国でのフィールドワークの成果を扱っている。科学書というよりむしろエッセイ、あるいは欧米で流行しているクリエイティブ・ノンフィクションのスタイルである。進化学者でありエッセイストでもあったスティーヴン・ジェイ・グールドとその盟友リチャード・ルウォンティンの思想がストーリーの軸になっている。なおついでに紹介しておくと、今年10月に千葉が刊行した「科学的に正しいの罠」（SB新書）は、一見スタイルと内容は別物だがコンセプト的には本書の姉妹書である。こちらは彼らの思想を中核に据えつつ、信頼できる科学はどのようなものか、現代の科学に基づく意思決定はどうあるべきかを、旧ソ連の科学や優生学、人種科学、創造科学などを題材に説明を試みている。

ISBN 978-4-908203-36-7

吾妻家文書第二集 ―近世武士の由緒と戊辰戦争―

荒武賢一朗、岩出山古文書を読む会編

東北大学東北アジア研究センター叢書第 77 号　2025 年 12 月刊　　text: 荒武賢一朗

上廣歴史資料学研究部門では、岩出山古文書を読む会（宮城県大崎市）と共同で、北海道当別町教育委員会所蔵吾妻（あがつま）家文書の調査および研究を進めている。東北アジア研究センター 叢書では、『岩出山伊達家の戊辰戦争』（53号）や『岩出山伊達家の北海道開拓移住』（64号）、前作『吾妻家文書第一集―岩出山伊達家の組織―』（76号）に続いて4作目となる。本書では、江戸時代に岩出山伊達家（仙台藩一門）の家老をつとめた吾妻家および伊藤家の系図や先祖の来歴を記す古文書と、岩出山伊達家の家臣たちが経験した戊辰戦争から北海道移住の関係書類を収載している。第一部の論考編（菊地優子・荒武賢一朗・倉田守・佐藤憲一執筆）では、第二部の資料翻刻編に掲載する57点の資料についてその特徴を示し、とくに注目する最古の「一木四銘」文書や、吾妻謙の妻しげのに関する記録について、研究動向や関連情報を織り交ぜながら詳しく論じた。結果、江戸時代の武士に関する歴史を紐解くのみならず、先祖から伝えられる家系や縁戚関係を明らかにしつつ、当時の社会状況を具体的に知る手がかりを得たほか、さらに明治以降の古写真も含めて重厚な内容となっている。吾妻家文書を取り上げた既刊のセンター 叢書とあわせて通覧すると、江戸時代の地域運営や、武家における儀礼と作法、そして幕末維新期の社会情勢を把握することができよう。

近年の熊出没増加とフィールド調査への影響 －共同研究と個人研究－

宮本毅
（日本・朝鮮半島研究分野／助教）

今年は熊出没のニュースが頻繁に流れ、9月以降は人身被害も多く発生し、大きな社会問題となっている。これまで30年近く東北地方の山々を歩いてきて、写真のような熊の痕跡は多く確認していたが、熊と遭遇したのは1度のみだった。今年は9月に青葉山で1度、10月に十和田地域での調査時に1度といずれも車窓を隔てて遭遇するなど、やはり熊の生息数が増えているのを実感するところである。しかし、火山地質学を専門とする私の場合、火山地域での調査は山間部が主となるため、すでに数年前から熊増加の問題には影響を受けており、調査を見合わせるということもすでに発生していた。

近年、十和田地域、鳴子・最上地域を主として調査・研究を行っているが、十和田火山はカルデラを形成する大規模噴火を繰り返してきた火山で、大規模噴火を繰り返すメカニズム解明など火山学での重要なトピックスを目的に研究を進めてきた。一方で、最上盆地は向町カルデラと呼ばれ、100万年以上前の大規模噴火によって形成されたとされているが、その噴出物はまだ特定されていない。その噴出物を特定することは形成時期を決定できるだけでなく、ローカルではあるが、その地域の成り立ちを知ることが可能となる。

火山研究に限らず、研究の形態としては複数の研究機関や研究者と行う共同研究と、個人レベルで個人の興味に沿って行う個人研究に区分される。私の場合は十和田地域における調査が原子力規制庁との間で行なっている共同研究に該当し、複数の研究者の知見をもとに大きな課題に取り組むというところである。もちろん野外調査も複数人で行われ、露頭を前にして活発な意見交換を行う議論は大変有意義である。現状の熊の問題に対しても、各人が熊対策をし、議論中も誰かが熊鈴を鳴らして警戒するなど、現状でもほぼほぼ問題なく調査を進めることができている。それに対し、鳴子・最上地域は個人の知的好奇心に応じて、個人の裁量のみで実施する個人研究で、このような課題の多くは学生の卒業研究として始めたものが多く、結論に辿り着く前に学生が卒業してしまい、中途半端な状態でとどまってしまうケースが多い。以後も個人の興味に合致しないなど、後進の学生がそれを引き継ぐのも難しく、課題解決を目指し私一人で調査を続けるなど、鳴子・最上地域もこれにあたる。一人での調査は、そこで議論を行う相手もおらずどうかと思われるかもしれないが、これも大変重要な機会となっている。というのは、実験室や居室で研究対象を目前として熟考するのと同じで、単にそれが野外であるというだけにすぎないからである。他の話に耳を傾ける機会がない分、とにかくいろいろな考えを巡らせることができ、思わぬアイディアも浮かんでくる場ともいえる。徒歩での移動時も孤独を紛らわせるという効果もあるのか、様々な考えを巡らせるよい機会になっているのだが、移動時はメモを残さない場合が多く、その時のみの考えとなるのが大半であるのも事実である。露頭調査は周囲環境に背を向けてとなるため背後が留守になるとともに熊鈴も鳴らないため、意識して鈴を鳴らしながら調査をするよう心がけているが、考えに熱中すればするほどそれが留守になってしまい、不意の物音にゾッとするようなケースも少なくない。一方で熊避けに集中すると露頭を観察する頭が散漫となり、折角の熟考する絶好の機会が奪われることとなっている。

十和田湖北東、惣辺牧野での木製標識。標識下部は熊により壊され、隙間には熊の毛が挟まっていた。（2021年9月撮影）

以上のように、熊の出没がすでに日常生活への弊害となっているので当然の話ではあるが、フィールドを主体とする研究において、特に個人研究での調査には大きな打撃であり、早くこの状況が解決に向かうことを願うばかりである。

編集後記

ロシアのウクライナ侵攻は前回冬季オリンピックとパラリンピックの間に始まり、もう4年が経とうとしています。私には「もう」ですが、ウクライナの方々は長く感じているでしょう。アメリカ主導で和平交渉が進められていますが、ノーベル賞が目的ではない、真の和平の早期実現を願います。
（後藤章夫）

CNEAS
Center for Northeast Asian Studies

東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第107号

2025年12月24日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009　FAX 022-795-6010

Facebook をチェック!
X（旧Twitter）をチェック!

ISSN 1344-9095